

旧秋田商会ビル

旧秋田商会ビルは、伝統的な建築に西洋の要素や調度を取り入れたデザイン運動である大正時代（1912-1926）のモダニズムの代表的な例である。秋田商会の社長は家族とともにここに住み、内装デザインの多くは、彼自身の成功や身の安全に対する彼の配慮を反映したものとなっている。

戦時特需での建設

秋田寅之介（1874-1953）は秋富寅之介として生まれ、1905年に秋田商会を設立した。もともとは家業の製材業を営んでいたが、日清戦争（1894-1895）とその後の日露戦争（1904-1905）を契機に食糧供給業に進出した。寅之助はこれらの事業の利益を秋田商会の設立に投じた。その後40年間にわたり、彼の貿易・海運会社は当時日本の支配下にあった台湾、朝鮮半島、満州を中心に25の海外支店を開設した。特に、満州への鉄道建設資材の輸送と、自らレールを敷設する作業の双方を行い、東清鉄道の建設に携わった。会社の成長に伴い、寅之介は事務所兼家族の住まいとして1915年にこのビルを建てさせた。

建築様式の融合

旧秋田ビルは、日本国内初の鉄筋コンクリート造建築物の僅か4年後に建設された、西日本初の鉄筋コンクリート造建築であった。コンクリートが注がれる前の見慣れない檻のような鉄筋補強作業風景は、近隣の人々を寅之助が動物園を建てていると思わせたらしい。完成した建物も印象的な佇まいがあり、屋上庭園の南西の角に銅タイル貼りの塔のドームがそびえている。

1階の事務所は建物の外観に合わせた西洋風の間取りと調度であった。しかし、2階と3階は畳敷きで、襖の上には飾り欄間がある。これらの階は寅之介とその妻の琴子（1877生まれ）、娘の梅子、その夫の三一も住んでいた。屋上には賓客をもてなすための茶室を備えた日本庭園があった。

この上層階では、20世紀初頭の裕福な家族の生活を見学することができる。着物を収納するための大きな杉の箆笥や、ペダル式のヤマハのオルガンなどからは、虎之助の娘への溺愛ぶりを伺わせる。階段の手すりには、秋田の社章（棒と3つの丸）が黒檀で象嵌されている。この社章は、かつてこの地を治めていた毛利家の家紋を模したものである。

3階の中央には畳敷きの大きなスペースがある。このスペースは柱とスライド式の間仕切り（襖）によっていくつかの小さな部屋に分割されているが、それらを取り除いてひとつ

の広大な部屋とすることもできる。建物内にある水洗トイレやダムウォーターなどの設備は、寅之介が最新の文明の利器と取り入れていたことを伺わせるものだ。（水洗トイレはわずか1年前に日本に入ってきたばかりだった。）

異例に厳重な住居

建物の設計には耐火性や安全性への配慮が見られ、これは他の下関の歴史的建造物にはない特色である。正面玄関には鉄製のセキュリティドアがあり、1階の窓には鉄格子がはめ込まれており、メインオフィスの非常口は外のコンクリート製防火壁へとつながっている。

住居スペースを守るセキュリティはより厳重である。階段は鉄格子のついた鉄の扉で守られ、手すりはずり抜けられないように密着している。何の標示もないスライド式の仕切りは3階奥にある秘密階段を隠しており、廊下の一角にある低いドアには、誰かが乗り越えられないように釘が打ってある。こうした措置は戦間期における治安悪化への対策であったと考えられる。